

タブ 1

(主人公の仲忠は五歳の頃、頼る者の無い母親を自ら釣った魚で養っていたが、そのうち冬になり魚が取れなくなった)

かかるほどに、年返りa(ぬ)。この子、まして大きに聰くかしこし。変化の者なれば、ただ大人のやうになりて、人の見ゆれば、「たが子ぞ。親はたれとかいふ。このわたりにあるなるべし」などいひて求むれば、おのづから尋ねも来b(ぬ)べし。かく歩きて①(人にも見え知られじ)。②(この川のみやは魚はある)、と思ひて、下りて、その川より渡りて、北ざまにさして行きて、山に入りて見れば、大いなる童、土を掘りて、物を取り出でて、火を焚きて焼き集めて、また大いなる木の下に行きて、椎、栗などを取りて、この子を、「③(何しに、この山にはあるぞ)」と問へば、「魚釣りに来つるぞ。おもとに食はせむとて」といへば、「山には魚はなし。また、生けるもの殺すは罪ぞ。これを拾ひて食べ」と教へて、この掘り拾ひ集めたる物どもをとらせて、童は失せぬ。この子、うれしと思ひて、持て行きて母に食はす。

この後は、山に入りて、見せ知らせし芋、野老を掘りて、木の実、葛の根を掘りて養ふ。雪高う降る日、芋、野老のありどころも、木の実のありどころも見えd(ぬ)ときには、この子、「④(わが身不孝ならば、この雪高く降りまされ)」といふときに、いみじう高く降る雪、たちまちに降りやみて、日いとうららかに照りて、ありし童出で来て、例の芋、野老焼き調じて、とらせて失せぬ。

かく遙かなるほどにし歩くも、苦しう覚えて、いかでこの山に、さるべきところもがな。近くて養はむ、と思ひて、⑤(山深く入りて)見れば、いみじういかめしき杉の木の四つ、物を合はせたるやうに立てるが、大きなる屋のほどにあき合ひてあるを見て、この子の思ふやう、ここにわが親を据えたてまつりて、拾ひ出でむ木の実をも、⑥(まづまゐらせばや)、と思ひて、寄りて見るに、いかめしき牝熊、牡熊、子生み連れて住むうつほなりけり。

(「うつほ物語」による)

※変化の者……………神仏が人の姿となって現れたもの

※おもと………母親のことを指している

※野光………根が食用になるヤマノイモ科の植物

タブ 2

問一 二重傍線部ⓐ～ⓓのうち意味が他と異なるものとして、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

[1]

1 Ⓛ 返りぬ

2 Ⓜ 来ぬ

3 Ⓝ 失せぬ

4 Ⓞ 見えぬ

問二 傍線部①の訳として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

[2]

1 人に見られたり知られたりするだろう

2 人に見られたり知られたくない

3 人に見られたり知られることはない

4 人に見られたり知られたりしたい

問三 傍線部②の意味として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

[3]

1 この川の宮に魚は住みついている

2 この川のどこに魚はいるのだろうか

3 魚はこの川以外の所にもいるはずだ

4 魚はこの川にしか住んでいないようだ

問四 傍線部③の意味として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

[4]

1 何のためにこの山にやって来たのか

2 どんな食べ物がこの山にはあるのか

3 どうしてこんな山中に住んでいるのか

4 何のためにこの山で生まれてきたのか

問五 傍線部④の訳として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

[5]

- 1 私がもし親不孝ならば、この雪はもっと降るだろう
- 2 私がもし親不孝ならば、この雪よもっと降りつもれ
- 3 私が親不孝なので、この雪は激しく降るのだろう
- 4 私が親不孝なので、この雪は高く積もってしまった

問六 傍線部⑤の理由として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

[6]

- 1 冬になって雪で食料が見つからなくなったので、雪の無いところを探すため
- 2 人に見られたり知られたりするのを嫌って、人の住んでいないところを探すため
- 3 子供の身で母親を養い親孝行を尽くしているのに報われないので、死に場所を探すため
- 4 母親を養うのには食料を得やすい山がいいと思ったので、そこで住める場所を探すため

問七 傍線部⑥の意味として、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

[7]

- 1 真っ先に母親に食べ物をさしあげたい
- 2 最初に食べ物をうつほに納めておきたい
- 3 さっそく熊を訪ねてあいさつをしよう
- 4 どうにも行き場が無くて参ってしまう

問八 本文の内容と合致するものとして、最も適切なものを次の中から選び、その番号をマークせよ。

[8]

- 1 仲忠は体は大きいがまだ子供なので、山に魚を探しに来るなど一般常識に欠けているとたしなめられた
- 2 山で出会った童は仲忠が孝行であるのを知って山の食料のことを教示し、更に山奥に住むことを示唆した
- 3 仲忠は奇縁により山で食料を見つけられたが、今の生活が苦しいのでさらに山奥に入つて生き熊と出会った
- 4 孝行が不十分なので仲忠は食料を見失ってしまい、山奥で見つけた食料はうつほに納めることにした

タブ 3

問一 解答:[1] 4

【解説】助動詞「ぬ」の識別

これは古文の超頻出問題だ。絶対に落としてはいけない。

- ・1 ①返りぬ:直後に句点。「ぬ」で文が終わっている。これは完了の助動詞「ぬ」の終止形だ。「年が明けた(暮れた)」という意味。
- ・2 ②来ぬべし:**「ぬべし」「つべし」の「ぬ・つ」は強意(確述)**だ。「きっと～だろう」のパターン。これも完了「ぬ」の派生。
- ・3 ③失せぬ:直後に句点。1と同じく完了の「ぬ」の終止形。「消えてしまった」。
- ・4 ④見えぬとき:「とき」は体言(名詞)。直前の「ぬ」は連体形だ。
- ・もし完了の「ぬ」なら、連体形は「ぬる」になるはずだ(な・に・ぬ・ぬる・ぬれ・ぬ)。
- ・形が「ぬ」のまま連体形になっているということは、これは打消の助動詞「ず」の連体形「ぬ」だ(ず・ず・ず・ぬ・ね・〇)。
- ・よって、これだけが**「打消(否定)」**の意味を持つ。

問二 解答:[2] 2

【解説】助動詞「じ」の意味

「じ」は打消推量(～ないだろう)か、打消意志(～まい・～ないつもりだ)だ。

文脈を見ろ。「かく歩きて(このように目立って歩き回って)」→「人にも見え知られじ(人に見られたり知られたりしたくない／するまい)」→「と思って、山に入った」という流れだ。

自分の意志で隠れようとしているのだから、2が正解。

問三 解答:[3] 3

【解説】係助詞「やは」の反語

「やは」「かは」を見たら、まずは反語(～か、いや～ない)を疑え。

「この川のみやは魚はある」→「この川だけに魚がいるだろうか、いや、他にいもいるはずだ」となる。

だからこそ、彼はこの川を捨てて、他の場所へ移動したのだ。

問四 解答:[4] 1

【解説】語句の意味

「何しに」は「何をしに」、つまり**「何のために(目的)」**や「どうして(理由)」を問う表現だ。

山奥に子供がいるのを怪しんで、「何をしに、この山にいるのか」と問うている。

問五 解答:[5] 2

【解説】命令形と文脈

ここが少し難しいが、MARCHレベルなら食らいつきたい。

「降りなされ」の「れ」に注目。「まさる(四段・未然)」+「れ(受身・自発...)」ではない。「まさる(四段)」の命令形「なされ」だ。

直訳すると「我が身が不孝ならば、雪よ、もっと高く降り積もれ」。

これは「誓言(うけひ)」と呼ばれるもので、「もし私がクロなら罰を与えよ(でも私はシロだと信じている)」という逆説的な祈りだ。文法的にも「命令形」になっている2が正解。

問六 解答:[6] 4

【解説】読解(理由説明)

傍線部の直前の思考を追え。

「かく遙かなるほどにし歩くも、苦しう覚えて(こんなに遠くまで歩くのもつらい)」

↓

「いかでこの山に、さるべきところもがな(なんとかしてこの山に、適当な場所がないかなあ)」

↓

「近くて養はむ(食料のある場所の近くで母を養いたい)」

↓

だから、住処を探して「山深く入りて」見たのだ。

食料(木の実など)がある山に住めば、移動の苦労がないからだ。

問七 解答:[7] 1

【解説】助詞「ばや」と敬語

- ・まづ:真っ先に。
- ・まゐらせ:「まゐらす」は「与ふ」の謙譲語。「差し上げる」。
- ・ばや:自己の願望の終助詞。「～したい」。

つなげると、「(見つけた木の実を)真っ先に(母に)差し上げたい」。親孝行な息子の心情だ。

問八 解答:[8] 3

【解説】内容合致

消去法でいくぞ。

- 1:x。童(実は神仏の化身)は常識がないとたしなめたのではなく、「殺生は罪だ」と教えたのだ。
- 2:x。童は食べ物をくれたが、「もっと山奥に住め」とは言っていない。住む場所を探したのは仲忠の意志だ。
- 3:o。魚が取れなくなり、奇妙な童に山の食べ物を教わった(奇縁)。しかし通うのが「苦しう覚え(つらい)」ので、山に入って住処を探したら、うつほ(木の空洞)を見つけ、そこに熊がいた。本文の流れ通りだ。
- 4:x。仲忠は親孝行だ。「不孝ならば雪降れ」と言って雪が止んだのは、彼が孝行息子である証明だ。

タブ 4

和訳

そういううちに、年が明けた。この子(仲忠)は、年齢以上にひどく聰明で賢い。(神仏の)変化の者であるので、見た目がただの大人のようになって、(それを見た)人が、「誰の子だ。親は誰だと言うか。このあたりに住んでいるのだろう」などと言って(親を)探すので、(放っておけば)自然と尋ねて来てしまうに違いない。

「このように出歩いて、人に見られたり知られたりしたくない。魚はこの川だけにいるのだろうか(いや、他の場所にもいるはずだ)」

と思って、川を下り、その川から渡って、北の方角を目指して進み、山に入ってみると、大きな子供が、土を掘って、物を取り出して、火を焚いて焼き集めて、また大きな木の下に行って、椎や栗などを取って(いた)。

(その大きな子供が)この子(仲忠)に、「何のために、この山にはいるのか」と問うと、

「魚釣りに来たのだ。母に食わせようと思って」と言う。

(すると大きな子供は)「山には魚はない。また、生きているものを殺すのは罪だ。これを拾って食え」と教えて、この掘り拾い集めた物などを(仲忠に)与えて、童は消えてしまった。

この子(仲忠)は、嬉しいと思って、持つて行って母に食べさせる。

この後は、山に入って、(童が)見せ知らせてくれた芋や野老(トコロ)を掘り、木の実や葛の根を掘つて(母を)養う。

雪が高く積もるほど降る日、芋や野老のありかも、木の実のありかも見えない時に、この子が、

「我が身が不孝ならば、この雪よ、もっと高く降り積もれ(もし私が親孝行ならば、降り止んでくれ)」

と言うと、ひどく高く降っていた雪が、たちまちに降り止んで、日がたいそうのどかに照って、以前の(あの)童が出てきて、いつもの芋や野老を焼き調理して、(仲忠に)与えて消えてしまった。

このように(家から山まで)遠い距離を歩くのも、苦しく感じられて、

「なんとかしてこの山に、ふさわしい場所がないものか。(食料の)近くで母を養いたい」

と思って、山深く入つて見ると、たいそう立派な杉の木が四本、物を合わせたように立っているのが、大きな家ぐらいの広さで組み合つてゐるのを見て、この子が思うことには、

「ここに私の親を座らせ申し上げて、拾い出す木の実をも、真っ先に差し上げたいなあ」

と思って、近寄つて見ると、いかめしい牡熊と牡熊が、子を連れて住んでゐる「うつほ(木の空洞)」であったよ。